

亡びることなき抵抗者たち——不死なるものムスタズアフィーン

松本耿郎

1 悲劇の始まり

美醜、善悪、正不正などの対概念による二分法が数千年、あるいはもっと前から人間の歴史を血塗られたものにしてきた。自らを善なるものと自認したものは、悪と断罪したものを敵認定する。これは二分法であり一種の善悪二元論（Manichaeism マニ教主義）である。埴谷雄高氏が指摘するように数千年の人類の政治行動の根底にあるものは残念ながら「やつは敵である。敵を殺せ」という単純な原理である。現代イスラエルはシオニズムという新 マニ教主義に支配されている。それゆえにシオニスト・イスラエルはハマースと敵対し、ヒズブッラーと敵対し、イラン・イスラーム共和国と敵対し、いわゆる「抵抗の枢軸」を絶対悪と看なして攻撃・虐殺を継続する。本来純粋一元論であるユダヤ教には二分法、あるいは マニ教主義はなじまない。こうした二分法、あるいは新マニ教主義が猛威を振るい始めると、その被害者である純粋一元論のイスラーム世界にも影響を与えて、一元論の中に善悪二元論 マニ教主義を造り出してしまい流血の応酬を引き起こしてしまう。

現在、中東・西アジアを覆う戦雲の中にもこの単純な原理が見えてくる。ユダヤ教徒居住地区でなく、「ユダヤ民族国家」を創設しようとするシオニストは、この計画の実現が善であるとし、それを妨害する者を悪と認定する。

正統派ユダヤ教徒は、自らを自らが犯した罪ゆえに故国から追放され離散の民として苦難に耐えながら救い主の到来を待ちつつ生きるのが敬虔なユダヤ教徒の生き方であると考えてきたし、今もそう考えている。それにもかかわらず、この考え方を棄ててユダヤ民族国家を建設しようとするのが「新しいユダヤ教徒」、すなわちシオニストである。シオニストはユダヤ民族国家建設を善と見なし、この計画を妨害するものを悪と見なす。その場合、悪と見なした者を排除するためにはまったく容赦しない。悪を滅ぼすためにはいかなる残虐行為でも許されると考え、非人道的な迫害を正当化する。

このような二分法は排中律を帰結するから対立する命題も中間項的な存在も認めない。それは排除の論理である。このように排除を前提にした二分法はタウヒード(tawhīd 唯一神観)を根本観法とするイスラーム的世界観にはなじまないものである。この世界観は、一にして多、多にして一、という世界観を基礎とする存在一性論に発展する。このような考え方では存在するものが多ければ多いほど唯一の真実在者の栄光はいや増すと考えられている。多様性を限りなく包摂していこうとするのだから一方を選び他方を破棄するという二分法はなじまない。この純粋一元論を基礎に 組み立てられた存在一性論は、かつて多様な文化を緩やかに統合するイスラームの王朝帝国の統治理論となっていた。オスマン帝国、ムガール帝国、ガージャール朝ペルシャ帝国などが二〇世紀初頭まで、それぞれ中東・西南アジアの一定地域を支配していた。これらのイスラーム諸帝国の統治理論の枠組みは存在一性論だった。

そこへ西欧列強が近代文明とともに、中東・西南アジア世界の富を強奪するために怒涛のようになだれ込んできたのである。

2 文明という野蛮

「文明」という語が野蛮の克服という意味であればよいが、「西欧近代文明」は残念ながら「野蛮さ」の技術革新をしたのであって「野蛮さそのもの」と決別していなかった。西欧列強は、産業革命、技術革新に成功した先進文明世界であると自らを規定し、イスラーム世界を奇怪な風習に満ちた野蛮な世界と規定した。それがオリエンタリズムの本質である。それに加えて人種論、キリスト教至上主義の宗教学、社会進化論など似非学問が西欧社会に流行し、西欧のイスラーム世界侵略を正当化したのである。

シオニストのパレスチナ侵略もまた西欧のイスラーム世界侵略の一形態として捉えることができる。最初からこの侵略は人権無視、人種差別に基づいて行われている。シオニストは「土地なき民に、民なき土地を」という虚偽宣伝を流布させた。西欧社会の無知な大衆は「民なき土地」なら武装入植者が入り込んでも問題ないと思いついたのである。ドイツ、ポーランド、東欧諸国などユダヤ人迫害の歴史を持つ国々の大衆は、その歴史的事実に負い目を感じる所以でこの宣伝を歓迎した。しかし現実には全く違って、パレスチナにはアラブ系のイスラーム教徒、アラブ系ユダヤ教徒、アラブ系キリスト教徒が共存共生していた。パレスチナは「民なき土地」などではけっしてなかった。そこは存在一性論的多様性共存のタウヒード的世界だった。パレスチナは一〇世紀初頭の後ウマイヤ朝アブドッラフマーン三世治下のスペインのように、ユダヤ教徒・キリスト教徒・ムスリムが平和共存共生する所だった。しかしながらここもキリスト教徒によるレコンキスタ戦争が激しくなると平和共存社会が崩壊した。これと同様に、パレスチナにもシオニスト武装入植者がなだれ込んできたのである。その結果長く続いた三教共存共栄のパレスチナが流血の世界に変容したのである。

3 キリスト教世界の問題としてのパレスチナ問題

そうなる原因はキリスト教世界のユダヤ教徒迫害という歴史的事実である。キリスト教徒がユダヤ教徒を迫害するのは、キリスト教の中で発展した二分法（マニ教主義）に基づく「やつは敵である。敵を殺せ」の原理に依っている。ユダヤ教改革者イエスが説いた隣人愛と全く異なる実践である他者虐殺がキリスト教世界でユダヤ人に対して実行され続けたのである。このように迫害された経験をもつシオニストたちが、自らが受けた暴力の被害を自分たちより弱い者たちであるパレスチナ人に向けたのである。暴力の被害者が被害による怨恨をさらに弱い者に向け、あらたに暴力の犠牲者を生み出す現象は世界的にも広く見受けられる。被害者が加害者になるのだ。このためシオニストたちはパレスチナ人に対し、この「やつは敵である。敵を殺せ」の原理を実践に移すのである。シオニストによるパレスチナ人虐殺にはこのような心理学的原因を認めることができるであろう。

4 イスラームの抵抗

このシオニストの迫害に対抗するために、その多くがムスリムであるパレスチナ人も二分法を採用したのである。はじめは民族解放論やマルクス主義的階級闘争理論に基づく敵味方二分法を根拠にシオニストと対決していた。この二分法は社会主義陣営と自由主義陣営が対決している国際情勢の中ではある程度有効だった。しかし社会主義陣営の勢力が衰え始めると中東・西アジアのナショナリストや左翼は民衆の支持を失っていった。

こうした状況の中で外来の思想や理論ではなくイスラームに固有の世界観と人間観に根拠をもつ抵抗の理論を構想し始めたのである。パレスチナに押し寄せ、人命と財産を奪いながら傲岸不遜に居直るシオニストたちを強者、高慢な権力者たちを『クルアーン』に見える単語「ムスタクビリーン(mustakbirīn 強者・高慢な者たち、権力者たち等の意)」と呼び、シオニストに迫害されて生命・財産を奪われるパレスチナ人を虐げられた弱者「ムスタズアフィーン(mustad'afīn 虐げられたもの、非力な弱者の意)」と呼んで、互いに対立する二つの存在者と位置づける。

もともと『クルアーン』の4章アーヤ76など4章の数か所にみえる言葉ムスタズアフィーンと16章アーヤ23やアーヤ25に見えるムスタクビリーンはそれぞれ別の文脈の中に現れる単語である。一つの文脈中で対立的に使用されている単語ではない。すなわち両語は対概念として使用されていない。

しかし、ムスタズアフィーン(弱者)はジハードに参加せずともアッラーの庇護の対象であり赦しの対象であるとされるが、ムスタクビリーン(高慢な者たち)を唯一神アッラーは好まないと記されている。したがってこれら二つの語はアッラーから見れば対立関係にあることになる。こうした状況の中で外来の思想や理論ではなくイスラームに固有の世界観と人間観に根拠をもつ抵抗の理論を構想し始めたのである。パレスチナに押し寄せ、人命と財産を奪いながら傲岸不遜に居直るシオニストたちを強者、高慢な権力者たちと見なした。シオニストを『クルアーン』に見える単語ムスタクビリーンと呼び、シオニストに迫害されて生命・財産を奪われるパレスチナ人を虐げられた弱者ムスタズアフィーンと呼んで、互いに対立する二つの存在者として位置づける——この二つの単語を対立する概念として現代世界の状況分析のためにクローズ・アップしたのは、イラン・イスラーム革命の指導者アーヤトッラー・ルーホッラー・ホメイニー師と彼のサークルの人々であろう。

その見解では帝国主義者・植民地主義者そしてシオニストはムスタクビリーンであり、彼らが困窮する中東・西アジアの弱者を迫害し、パレスチナ人を虐殺しその居住地を奪い取り、さらにパレスチナ人を難民にしてムスタズアフィーンにしていると見なすのである。イラン・イスラーム革命の指導者たちは正義を希求する良きムスリムはこのような不正を放置してはならないと考えていた。とりわけペルシャの伝統文化では、人間は集まって一体となるものだから、その部位の一つが痛む時には他の部位も安穏となれない。だから他人が苦境にあるのを悲しまないなら、そういう人間は人の名に値しない、という倫理観が脈々と息づいている。そのため、イラン・イスラーム革命が成功し、イラン・イスラーム革命政府が成立すると、イラン・イスラーム革命政府はイスラエルおよびその後ろ盾のアメリカと直ちに断交し、エルサレムの聖地「岩のドーム」とその寄進地、すなわちクヅス Quds(聖地)の解放を国家目標に掲げたのである。そしてイラン・イスラーム革命防衛隊を創設し、ヒズブッラー(アッラーの党)をレバノンに創設し、イスラエルに対してクヅス解放のためのゲリラ戦を開始した。

イスラエルとアメリカはムスタクビリーンであり、イランとパレスチナはムスタズアフィーンなのである。

しかし繰り返しになるが、こういう二分法あるいは二元論は純粹一元論であるイスラームにはなじまないものである。ところが「法学者の監督権 wilāyat al-faqih」論を主張してイスラーム法学者の政治的指導権の確立を求めた最高模範の一人ルーホッラー・ホメイニー師は、イスラームの本義を守るためにイスラームの敵と味方を峻別する二分法を導入したのである。それは敵を明らかにして打倒してゆくという最も単純で原初的な政治原理に簡単に転換されてしまう。そうなるとこのような二分法は流血を伴う政治的紛糾を生み出す可能性がある。このためホメイニー師と同格の法学者の幾人かは「法学者の監督権」論に反対し、法学者の政治介入を批判したのである。マシュハドのコンミー・タバータバーイー師は「法学者の監督権」論の批判者の代表である。イラクの十二イマーム・シーア派の最高指導者アリー・シースターニー師もそのような人物の一人である。アリー・シースターニー師は生命尊重を人生の最高価値とみなし生命の喪失を伴う政治的紛糾を制止するために力を尽くしている。

他方、戦闘的イスラーム法学者はイスラーム固有の概念を根拠にして弱者が強者を打倒するための闘争理論を構築したのである。しかし、ムスタズアフィーンが立ち上がりムスタクビリーンと戦おうとする時に、戦闘員を精神的に支えるのは中東・西アジアの文化に深く浸透している「戦士文化」である。「勇敢 ḥamāsah」、「騎士道精神 futuwwah」、「雄々しさ muruwwah」など男性優位社会のなかで培われた価値観が戦闘員の戦闘精神を鼓舞する。とりわけ「勇敢さ」を意味するハマースという単語は「イスラーム抵抗運動」の略称ハマースに通じるので、ハマースという略称そのものがムスリム大衆の尊敬と支持を集めた。しかしながらこれらの「戦士文化」を構成する諸価値は、もとはと言えばイスラーム以前の時代、いわゆるジャーヒリーヤjahiliyah時代の沙漠の「部族戦争の時代」の族長たちのあいだで生まれたものである。それはイスラームが克服しようとした「蛮勇Jahl」の価値観である。イスラームは「蛮勇」をいましめ「自制、寛容、深慮 ḥilm」をイスラーム文化の中心に据えたのである。しかしながらイスラームはジャーヒリーヤ時代の「蛮勇」を完全に克服することはできなかった。

そこでジャーヒリーヤの価値観に近い「戦士文化」の内実を文化研究の視点から分析すれば、その構成要素は家父長制、セクシズム、マチスモや名誉欲や男性同盟などである。これらに加えてイスラームが内包する禁欲主義に伴うミソジニーを認めることができる。もともと禁欲主義は初期イスラームの清教徒主義者の権力批判の手段であるが、反世俗主義と思想的エリート主義が結合しイスラーム神秘主義(スーフイズムtaṣawwuf)が成立した。このためイスラーム神秘主義には男性同盟やミソジニーが色濃く保存されて、「戦士文化」と密接な関係をもつ。それゆえに、十九世紀中期から二十世紀初頭にかけてイスラーム世界を侵略してきた帝国主義者や世俗化主義者や反宗教唯物論者に対しイスラーム神秘主義諸派が激しく抵抗し、武装闘争を挑んだのである。このように「戦士文化」はイスラーム社会のさまざまな分野に見え隠れしている。このため、「戦士文化」が内包する諸要素が女性・子ども・高齢者・障害者抑圧などを生み出す。残念ながら戦時体制が生み出す「戦士文化」の中では女性や子供や高齢者のような腕力に劣る者など「弱者」の意向は無視される。

酷薄さと破滅的側面をもつ「戦士文化」の特徴はシオニスト武装入植者たちにも、ヒズブッラーの戦士たちにも、ハマースの戦闘員たちにも共有されている。ムスタズアフィーンが蜂起し、ムスタクビリーンに戦闘をしかけ、戦争が始まると、いつも被害を蒙るのは銃後の女性、子ども、高齢者などである。ムスタズアフィーン(虐げられた者たち)が一旦蜂起し

戦士として戦い始めると、彼らは女性や子どもにとってはムスタクビリーン（強者）に変身してしまい、かつて弱者であって虐げられてきたムスタズアフーンが、戦いを避けて命を育む女性や弱者に犠牲を強いることになる。その典型的な例がアフガニスタンのターリバーン政権である。女性の人権を全く無視して、アフガニスタン女性の社会参画を一切認めないターリバーンはイスラームを歪曲して解釈し男性戦士同盟社会を作り上げようとしている。こんな社会に未来がないことを知らないターリバーンはまさにジャーヒリーヤ時代に回帰している時代錯誤者の集団であるとしか言いようがない。もちろんこんな馬鹿げた社会を変革しようとするアフガニスタンの女性たちがいる。アフガニスタン女性革命協会（略称 RAWA）の女性たちである。しかしながらこのように歪んだ「戦士文化」をアフガニスタンにもたらしたのは西欧列強のアフガニスタン侵略戦争である。侵略されれば、それに抵抗しようとする者たちが現れるのは当然のことである。そして抵抗闘争が始まれば社会が戦時体制になりムスタクビリーンに立ち向かうかつてのムスタズアフーンは、自らの背後にいるさらに弱い立場のムスタズアフーンに対してムスタクビリーンになってしまう。帝国主義の侵略戦争が続くかぎり最弱のムスタズアフーンは絶え間なく創り出されてゆくことになる。

こうした戦時体制下の悪循環を断ち切りたいという強い願いがイランの女性たちに二〇二二年の女性解放運動を起こさせた。この女性解放運動はヘジャーズをかぶっていなかったクルド人女性を風紀警察が虐待死させたことに対する抗議から始まった。女性を中心にしたこの抗議活動は単にドレスコード撤廃要求にとどまらなかった。抗議運動の質を深化させたスローガン「ZAN（女性）、JĀN（いのち）、ĀZĀDĪ（自由）」は戦士文化や戦争そのものに対する強い抗議のメッセージだった。運動は一時期激しく盛り上がったが、国家権力の厳しい取り締まりと懐柔策で下火となった。しかし女性たちのムスタズアフーンとしての自覚は消滅しない。彼女たちの平和と命と自由への願いは普遍性と道義性を持つものである。それは再燃を待つ熾火^{おきび}のように中東・西アジアの女性を核とするムスタズアフーンの心の中に残り続けている。この熾火が再燃しより広く燃え広がれば、地殻変動が起り、帝国主義諸国内部のムスタズアフーンの意識変革を引き起こすだろう。その時にこそ、西アジア・中東地域を包む戦争の暗雲が消散するのを見ることになる。

参考文献

- 井筒俊彦訳『コーラン』上・中・下、岩波文庫、1957年。
白杵陽『世界史の中のパレスチナ問題』講談社現代新書、2013年。
岡真理・小山哲・藤原辰史共著『中学生から知りたいパレスチナのこと』、ミシマ社、2024年。
加藤博『「イスラムvs. 西欧」の近代』講談社現代新書、2006年。
サアディー著・沢英三訳『ゴレスターン』1984年、岩波文庫、2024年。
アーティフ・アブー・サイフ著・中野真紀子訳『ガザ日記』、地平社、2024年。
S.サンド著・高橋武智監訳・佐々木康之・木村高子訳『ユダヤ人の起源—歴史はどのように創作されたのか』、ランダムハウス講談社、2010年。
芝健介『ホロコースト—ナチスによるユダヤ人大量殺戮の全貌』中公新書、2008年。
鈴木董『オスマン帝国—イスラム世界の「柔らかい専制」』講談社現代新書、1992年。

立石伯編『埴谷雄高政治論集』埴谷雄高評論選書1、講談社文芸文庫、2004年。
長沢栄治『エジプト革命－アラブ世界変動の行方』平凡社新書、2012年。
奈良本英佑『パレスチナの歴史』、明石書店、2005年。
N. G. フィンケルシュタイン著、立木勝訳『イスラエル擁護論批判－反ユダヤ主義の悪用
と歴史の冒瀆』、三交社、2007年。
藤田進『蘇るパレスチナー語りはじめた難民たちの証言』、東京大学出版会、1989年。
船津靖『パレスチナー聖地の紛争』中公新書、2011年。
R. M. ホメイニー著・富田健次編訳『イスラーム統治論・大ジハード論』平凡社、2003年。
松本耿郎『イスラーム政治神学－ワラーヤとウィラーヤ』、未来社、1993年
森まり子『シオニズムとアラブ－ジャボティンスキーとイスラエル右派 1880～2005年』
講談社選書メチエ、2008年。
モサブ・ハッサン・ユーセフ著・青木偉作訳『ハマスの息子』、幻冬舎、2011年。
ヤコヴ・ラブキン著・鶴飼哲訳『イスラエルとパレスチナ』岩波ブックレット、2024年。

松本耿郎(まつもと・あきろう)教授 一略歴一

1944年1月3日 北九州小倉市生まれ 本籍 愛媛県

1966年 早稲田大学第一文学部東洋史専修卒業。この間、慶応義塾大学井筒俊彦教授に
個人的に師事

1972年 早稲田大学大学院文学研究科博士課程西洋哲学専攻満期修了

1973年1月 イラン国立テヘラン大学文学部外国人コース入学。9月中退

1973年10月 イラン国立マシュハド大学神学部客員研究生、S.J.Ashtiyani教授に師事

1975年9月帰国。帰国後、埼玉工業大学、慶応義塾大学、早稲田大学、立教大学、東京大
学などで非常勤講師

1977年～1978年 外務省研修所講師

1981年 国際大学大学院国際関係学科助教授、同大学准教授、教授歴任

1991年 国際大学中東研究所所長

国際大学在職中に英国ダーラム大学、米国ヴァージニア大学客員教授

1995年 英知大学(聖トマス大学)教授、2005年から2009年まで英知大学図書館長

2014年 聖トマス大学退職

2026年1月7日 逝去

著書：『イスラーム政治神学：ワラーヤとウィラーヤ』未来社、1993年。『ペルシャ存在
一性論集』ビブリオ書店、2002年。「馬徳新哲学研究序説」駱駝舎、2014年。

編著：*Consciousness and Reality* (井筒俊彦記念論文集) 岩波書店、1995年。

翻訳：アリー・シャリアティ「革命的自己形成」アジア経済研究所、1981年。

その他、研究論文、翻訳、等 多数